

「信仰による忍耐と希望」（ローマ五・一〜二）

1 キリスト教人生論

この一月から、少し駆け足ですが、ローマの信徒への手紙を学び始めて、今日は早くも第五章に入ります。

今日の箇所は「このように」と始まっています。似たような言葉で始まっている章がローマ書にもう一つあります。第一二章です。そこは「こういうわけで」と始まっています。どちらも、話が一段落ついた、ここまで言ってきたことから、当然次のように言えるだろう、というような意味です。前のことをまとめながら、新たな段階のことをこれから語っていくという合図です。

それなら、この第五章、ここまでパウロが〈語ってきた〉のは何だったのでしょうか。そして、これから〈語ろうとする〉のは何なのでしょう。

このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています（一〜二節）。

ここまで、すなわち、一章から四章まで語ってきたことを、パウロは、「このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから」とまとめています。行いによってもない、割礼によってもない、律法を守ることによってでもない、ただ信じることによって人は義と認められる・見なされる、信仰による義、それがここまで語られたことです。

それなら、そこから帰結すること、あるいはそこにふくまれていることは、何でしょうか。それをパウロは、いまお読みしたように、「わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにして」いることだと、語っているのです。

こうして、パウロの関心が、いまや、〈人は信仰によって義とされる〉という事実から、そこから帰結することに向けられていることは明らかです。人は信仰によって義とされてどうなったかということです。信仰による義は、お題目ではありません。関心は人間に向けられます。福音によって生きている人間に向けられるのです。これがここから始まる新しい段階です。

今日の箇所について、ある註解者（ヴィルケンス）が、キリスト教的生を要約した短い概論と評しています。つまり、キリスト教的人生論とも言うべきものが短く示されているということです。

こうした理解を手引きとして考えれば、こうでしょうか。まずキリスト者の人生に

は、ある始まりがあります。それを示すのが、「今の恵みに信仰によって導き入れられ」というくだりです。

「信仰によって導き入れられて」キリスト者の人生は始まります。洗礼のことと考えていいと思います。そこへと、私も、いろいろの道を通って辿り着きます。そして救いへと「導き入れられて」、キリスト者の人生が、新しい人生が始まることになるのです。

次に、そのようにして開始された人生を、現在の生活を、ここでパウロはいろいろの言葉で言っています。「神との間に平和を得ている」とも言っていますし、「今の恵み」とも言っています。

この「平和」は、今日の箇所の終わりに出ている言葉、「和解」という言葉と置き換えることができるものです。

ここでパウロが言っていることの前提には、人は、神との間に良好な関係を失っているという聖書の人間観があります。この点は今日は詳しくお話しできませんが、すでにこのローマ書でも、パウロは、人は「皆、罪の下(もと)にある」(三・九)という言葉で語っている通りです。それが、イエス・キリストによって、この方を仲立ち(「仲保者」第一テモテ二・五)として、人は神との間に平和な関係に生きることができるようになったのです。それが、「今の恵み」です。私どもは神の恵みに立っているのです。

それではキリスト者の将来はどうなのでしょう。それをパウロは「神の栄光にあずかる希望を誇りにしています」と言っています。「神の栄光」は、地上にはない、天国であずかるものです。パウロは、ここで、それにあずかる希望は確かであって誇りにすらしっていると述べています。こうして洗礼から始まるキリスト者の人生は永遠の希望につながるのです。

むろんこのことが、ひとえに、「主イエス・キリストによって」であり、「キリストのお陰で」あることを、私ども忘れてはなりません。

2 苦難から希望へ

将来あずかる栄光を口にしたパウロでしたが、私どもキリスト者の人生、現在の生活には、何の困難も、何の痛みも、何の悲しみもないのでしょうか。決してそうではありません。私どものキリスト者の生活が、ここ、この世で営まれるかぎり、そういうことはないのです。

そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです。苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。希望はわたしたちを欺くことはありません(三〜五節)。

ご承知の通り、ここは、新約聖書を代表する聖句の一つです。それにしても「苦難をも誇りとします」というのは(口語訳聖書では「患難をも喜んで」。英訳、例

えば、リジョイス）、常識的でない言い方です。そんなことを言う人がいたら、かえって傲慢ではないかと思うほどです。

ふつう人は、できるだけ、困難も苦しみも避けたい。少なくとも自分にはふりかかってこないようにしてもらいたいと思います。そうは言っても思い通りにいかないのが現実です。様々の苦難が黙っていても押しよせます。信仰があるだけに、かえって鋭敏に感じられることも多いのです。

「苦難」という言葉には、一般的な苦しみや困難だけでなく、この世にキリスト者として生きていくがゆえに出会わざるをえない心の苦しみや、社会的な不利益や敵対も含まれています。これを書いているパウロ自身が、福音の伝道者として、まさにそうした生涯を送らざるをえなかったのです。

しかしそのような中でパウロは、苦難をも「誇り」とします、と書いています。仕方なく不利益をこうむっているということでもありませんし、嵐がすぎるまで野の草のように身を伏して、がまんしておこうということでもないのです。苦難を誇る、喜ぶというのです。

なぜ、苦難も誇る、喜ぶと言うのでしょうか。それは、苦難が忍耐を、忍耐が練達を生み、やがて希望に通じていることを、わたしは知っているからだと言うのです。しかし、言うまでもなく、こうした苦難から忍耐、忍耐から練達という連鎖をたどって希望に行き着くというのは決して当たり前のことではありません。人は苦難に遭うとあきらめ、へこたれ、さもなければ、自分の運命を呪い、現状の責任を他に転嫁したり、攻撃的に出ることもあります。程度の差はあっても、私どもはみなそのようなまことに弱い存在なのです。

「希望を生む」の「生む」（口語訳「生み出す」。英訳、プロデュース）という小さな言葉に、注意していただきたいと思えます。忍耐も練達も、そして希望も、苦難から、ひとりで出てくる、のではないのです。黙っていれば希望に「なる」のではないのです。私どもが会おう苦難が、もし忍耐と希望を生み出すという積極的な働きをするとすれば、それは、私どもが、私どもの苦難を、信仰をもって受けとる、ということがなければならぬのです。恵みの神においてそれを受け入れることがなければならぬのです。

同じように、三節の「わたしたちは知っている」という言葉にも、注意しなければなりません。この言葉でパウロは、自分の信仰の歩みに照らして、迫害者から伝道者へ、三〇年の歩みを通して、そのことを、私は実地に知っている、経験済みと言っているのです。たとえどんなに苦しいことがあっても、たとえつらいことがあっても、神はわたしを、わたしたちを見捨てはしなかった、耐えられない、逃れの道のない試練を、与えなかった（コリ一、一〇・一三）、それを私は「知っている」。それゆえ、これからのことについても、「苦難をも誇る」と言うのです。苦難から希望へと神信仰と神信頼によって鎖はつながるのです。

3 聖霊による神の愛の注ぎ

こうした、苦難から希望へ至る連鎖を、私どもに確信させる、本当に確かなもう一つのものがあるとパウロは言っています。

わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかも知れません。しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました（五〜八節）。

先に申し上げた、苦難から希望へ至る連鎖を、私どもに確信させる、本当に確かなもの、それは、聖霊の証しです。私どもに対する神の愛を、聖霊は、私どもに、私どもの心において確信させてくれるというのです。

神の愛とはどのようなものでしょうか。これを説明するのに、パウロは、大変興味深いこの世の事例を引き合いに出しています。「正しい人のために死ぬ者はほとんどいない」けれども、「善い人のために命を惜しまない者ならいるかも知れません」というのです。とても面白い観察です。しかしその場合、こう見ることはできないでしょうか。正しい人であろうが、親切にしてくれた人であろうが、その人のために命を捨てた人には、何かしらプラスになるから、そうしたのではないのか、そういう疑いが入り込む余地があるということです。

しかしイエス・キリストの場合は違うのです。イエス・キリストがそのために血を流された、命を捨てられた者たち、すなわち、私どもについて、パウロはこう書いています。

わたしたちがまだ弱かったころ

不信心な者のために

わたしたちがまだ罪人であったとき

神の義を受けるのに、神の救いを受けるのに、私どもにはそれだけの価値があるというのではないのです。むしろ私どもの側にはマイナス価値しかない。にもかかわらず、神は、御子イエスを遣わし、これを私どもに代わって裁かれたのです。裁かれるべき人が赦され、罪なき方が裁かれたのです。ここに恵みがある、ここに神の愛があると聖書は言うのです（ヨハネ一、四・一〇）。

このイエス・キリストの十字架の死と復活において示された神の愛、それが決定的である以上、たとえ私どもが、将来、神の裁きの前に立つとしても（ローマ一四・一〇）、私どもがキリストによって神の所有（もの）とされたという事実を、覆すものは何もありません。

今日の箇所終わり、九節以下は「なおさらのこと」「それだけでなく」とたたみかけるように文章が続いています。何が、なおさらのこと、なのでしょいか。現在の救いが確かなら、将来、神の栄光にあずかるのは「なおさら」確かなことだと言うのです。それほどに、いま、ここでの救いは重いのです。

（三月五日）